



## ご挨拶

辰巳会会長 鈴木治雄

平成二十三年三月十一日の東日本大地震の被災から二年になります。二万人からの死者、行方不明者を出し、今なお被災した土地・自宅を離れて生活している人々が三十万人を超えています。住宅の復興は遅れ、福島第一原発事故の放射性物質の除染も進んでいないようです。被災地の皆さんが安全・安心な生活を取り戻せるように復興を加速させてもらいたいです。

私は、大正七年の米騒動に端を発して鈴木商店が焼討ちされた同じ年に生まれ今年で九十五歳になりました。身体は年齢からしますと元気ですが、外出は用心しまして控えるようになっています。そのようなことで、辰巳会の例会も出席できず、皆さんとお会い出来ないことを残念

に思っています。

辰巳会は例会出席の人数も減少しています。創立当時は最も若いと思っていた私が最も高い年配者になり、辰巳会の過ぎ行く年月に思いを馳せるところです。本会を創立された方々は、今日、経済界・財界の歴史に名を残されています。辰巳会は創立時の方々が参集していた趣旨は半世紀を過ぎて変わっていますが、精神の何がしかでも繋いでいければ幸いです。

今年、長年デフレ経済が続きましたが政権交代を契機として脱却する方向へ動きだそうとしています。これによって経済が好転し、国民に明るさをもたらす社会になるよう願っています。辰巳会の皆様、どうか健康に留意されてお元気な人生をお送りください。

## 金子直吉に関する断片

鍋島 高明

### 犬と書生が優先する金子邸

「明治富豪史」などで知られるルポライター・横山源之助が金子直吉邸を訪ねるのは明治四十四年春のことだ。当時、金子と鐘紡の武藤山治は「須磨の浦の二大名物」といわれていた。武藤の名は広く世間に知れ渡っているのに、武藤より異彩を放つ金子のことが余り知られてないのはなぜだろうなどと首をかしげながら須磨の駅に降り立った。横山はこう描いている。

「金子の住宅は、一の谷の山腹に松林に囲まれながら立っている。すつくと、二タ抱えもある松が立っている。そこに形ばかりの門がある。肥え太った犬が獐猛な声を立てて吠える。門をくぐれば、遠くに小屋らしい家が見える。あっちにもこっちにも犬の声がする。小屋の近くに従い犬の吠声が高くなる、激しくなる」(実業界・明治四十四年五月号)

犬小屋だとばかり思った建物は犬小屋ではなく、金子の住居であった。

「部屋数は四ツか五ツ、応接間もなく、客間も飾らず、入って

すぐそこに風采の上がらない、メガネをかけた、小さな体の主人公はちよこなんとしている」

横山「随分犬が多いですな」

金子「私のような学問の何もない馬鹿は、知恵のある人間が使い切れません。私のようなもの言でも、正直に聞いてくれますから、犬はかわゆいのです」

そして後方の丘の上に二階建ての涼しそうな家が見える。多分、金子の離れ屋敷であろうと思つて質すと、学生たちの夏用の部屋だという。

金子は十数人の書生に学資を出し、帝大か高商に行かせているが、彼等は夏休みには東京や京都から避暑を兼ねてここ一の谷にやってくる。金子は書生のために自宅より立派な家屋を提供しているのだ。そして横山は一の谷ルポをこう結んでいる。

「初めてこの住居、この生活を見たものは、この異様な生活の人が、実業界の人気男金子直吉であると思う者はだれもあるまい。この簡易率直の人が東京に乗り出すと老巧藤山雷太らを威圧し、怪腕利光鶴松らをあごで使っている。思うに人物の真価は、虚名にあらず、実力である。美服に非ずして、手腕である」

### 天性の楽道家

金子直吉は生まれながらの楽道家である。昭和二年二月、鈴木商店は窮地に追いつめられる。そのさなか、金子は「実業之世界」誌で「三角形の原理からみた兎の年の好景気論」を展開する。当時経済人

も学者も一致して景気の先行きを悲観していたが金子は一人楽観的である。根拠は干支である。

「それは外でもない。今年は実に兎の年である。兎というものは、上へ上へと向上する一方である。鉄砲を向けても決して横に外れたり、下の方に隠れたりせずに、どこまでも、上の方に上の方にと飛んでゆく。…今年の財界はいよいよ上向きに転ずるに違いないと、こう大ざっぱな観測を下している」

金子は「まず図表を見ていただきたい」と三角形を描き、三辺を二分割して十二支をあてはめながら講釈に力が入る。その詳細を記す紙幅はないが、本丸が落城に瀕しながらも、「鈴木がこける時は日本がこける時だよ」と、気にとめる風もなく持論を繰り広げる。明治維新以来の経済事象と兎年の歩みを重ねながらの「卯年好景気論」は何時しか人々をその気にさせるのだから不思議だ。二カ月後の経営破綻など頭の片隅にもないようである。

## 豪州人に惹かれた金子直吉翁

金子直吉翁は昭和十九年（一九四四年）に亡くなって今年で七十年になります。鈴木商店のOBの親睦団体辰巳会は五月に神戸ポートピアホテルで七十年祭が行われます。

昭和五十三年十月の神戸新聞にオーストラリア人のインタビュ記事がありました。その人はなかなかの日本通でグリフィス大学で日本史を教えるロバート・D・ウォルトンさん。ウォルトンさんはなぜ鈴木商店の金子に惹かれたのかに記事では「総合商社の歴史といえば、三井、三菱が頭に浮かびます。けれども財閥銀

行を後ろに持たない鈴木生成こそ日本的です。近代国家へのすばらしい脱皮。明治・大正の時代の、彼はまさに日本のシンボルでしょう。貧乏で信用もない。その彼が砂糖と樟脳から事業を興し、エントツ男の異名どおり人絹や人工硫酸といった新技術を導入しました。普通の人よりきびしく、そして親切に…というキャラクターはマネができません。またウォルトンさんは、昭和五十年代を映して「あのころ（大正時代）は個の時代。いまは組織で企業が運営され、世界に通用しています。しかし高度経済成

長の秘密はあくまで、金子が代表するよう個から生まれています。いま、サラリーマンは組織の中で自信を失っているみたい。組織にがんじがらめになっても、独立をめざす覇気がほしいんです。もっと胸を張るべきです。」ウォルトンさんの「あのころは個の時代」平成のこの時代になって若い起業家が輩出しています。それにしても直吉翁はいかに巨大な「個」であったのかを知ることです。このインタビュは辰巳会本部（太陽鉱工内）で幹事の柳田義一さんが応対されて行われました。（記事引用 神戸新聞 昭和五十三年十月十三日）

## 辰巳会だより

### 辰巳会 本部総会

平成二十四年五月二十三日（水曜日） 正午  
於 神戸ポートピアホテル  
南館四階「レヴァンテ」

今年の会場は昨年同様の港島の神戸ポートピアホテルでの開催です。本日の開始に当り司会者の話があり、例年五月は辰巳会の全国大会として開催していますが、辰巳会発足から五十二年になり会員数が相当数減少して、神戸本部、東京支部の他に北は北海道から南は九州までの四支部の会員はほとんどが他界されました。それ故、四支部は残念ながら昭和の時代で自然解散しています。本来、本日の辰巳会は全国から出席される大会の催しですが、出席者はほぼ関西在住の皆様になり、東京支部の皆様もご高齢から出席が難しくなっています。本日の開催要領に全国大会の名が消えていることの説明がありました。この後、例年の会務報告は司会者から、五月十四日祥龍寺で幹事参列のもとに物故者法要が執り行われ、物故者二名の方が過去帳に記載され、総数一二二〇名にわたることが報告されました。

宴を始めるにあたり柳田辰巳幹事のご発声で一同乾杯をして会食と

なりました。

今回初めての出席になる三名の紹介があり、東京の鍋島高明様は来月より高知新聞に金子直吉を基にした鈴木商店を連載されることになり、これに関連したお話をされました。

■スピーチ

鍋島 高明 様

市場経済研究所会長

毎週書かれているコラムのことから、出光佐造は明治四十二年に神戸高商で鈴木商店を受験したが高畑誠一、永井幸太郎には早々と合格通知がきたけど出光佐造にはこないことで、わずか三人の酒井商店に入り、その後で合格通知がきたけど決めた約束を守り鈴木にはいかなかった。もしも鈴木に入っていたら面白いドラマがあったのではないかと思う。出光は鈴木と同じように株を公開せ

平成二十四年度  
辰巳会本部総会御出席者名簿  
(順不同・敬称略)

安東 浄	中 宏
池田 泰雄	中村 裕
今村 三郎	矢倉 慎吾
扇谷 勉	西村 昌彦
扇谷 睦	王鞍 延子
大谷 淳子	大塚 融
小野 晶子	井上 常子
楠瀬 正明	小宮 由次
鈴木 孝子	前田 章賀
高畑 美紀	鍋島 高明
東條 佳子	二十四名
松下 重男	(事務局)
柳田 辰巳	金野 和夫
貴答 恵子	貴答 祥子